

5

小論文の執筆について



初年次ゼミナール文科では、小論文の執筆が課されることになっています。ここでは他の授業もふくめて、大学でのレポート・論文の書き方について、基礎的な心構え・知識・技術をのべておきます。

5-1-1 入試で書く小論文との違い

入試での小論文……短い時間の中で、与えられた課題文を正確に読解して、設定された設問に沿って、それに対する自分の意見を展開する。

大学でのレポート・小論文……自分で課題を設定し、比較的長い準備時間の中で、資料や先行研究を探し、参照し、ときに批判しながら、新たな知見を導き出す。

みなさんの中には、大学の入学試験などで課される小論文の勉強をしてきた人が多いと思います。こうした小論文と、みなさんがこれから大学で書くことになる論文やレポートは全くちがうものだと考えておいたほうがいいでしょう。

入試の小論文は、一定の時間のうちに、課題文を正確に読みとって、そこに設定された設問にそって、自分の意見を展開するものです。意見を補強するうえで参照できる資料もありませんし、執筆する時間もかぎられています。受験生としての一般的な読解力や対応力、論理的な構成が求められていますから、あまり極端な主張は展開しないほうがよい、とされています。手際よく、バランスよく、が目標です。

それに対して大学の授業で課される論文・レポートでは、そもそも具体的な課題を自分自身で設定しなくてはなりません。資料も自分で探してこなくてはなりません。読解力や論理構成だけでなく、問題の立て方の独創性や資料探しの深さ（網羅性）など、さまざまな面が評価の対象になります。逆に言えば、さまざまな面を評価してもらうことができます。

また、渉猟した資料やデータをもちいて、先行研究を批判して、独自の知見を説得力のあるかたちで展開することが必ず要求されます。無難にまとめてもあまり高くは評価されませんし、個人的な感想を即興で述べただけでは不合格になります。当然ながら、それなりの準備期間が必要になります。

そして常識や通説をただなぞっているだけでは高い評価をえることはできません。世間一般に（あまり根拠なく）信じられているものにたいして疑問を投げかけたり、新たな知見をわずかでも付け加えることができ、はじめて本当に評価されるものになります。

みなさんはどうしたら「優」がとれるレポートが書けるか、手っ取り早く知りたいと思っているかもしれませんが、実は、その測りがたい評価基準を自分でつかめるようになる（＝内面化する）ことこそが、初年次ゼミナール文科の大事な目標のひとつなのです。実際に書いてみて、試行錯誤しながら、自分なりによいレポート、小論文とはなにか、考えてみてください。

5-1-2 課題の見つけ方／タイトルのつけ方

論文でもレポートでも、課題や問題は自分自身で設定しなくてはなりません。むしろ、この課題の見つけ方・置き方次第で、論文やレポートの出来が半ば以上きまってしまう、と言ってよいくらいです。誰かの意見の受け売りではなく、ほんの少しでも、自分なりの問題意識を発掘して課題を設定してみましょう（とはいえ、これが難しいのですが……）。

ただし、あまりに問題が大きすぎたり、漠然としているのは、一学期の演習の課題としては不適切です。もちろん個人的な、完全に自分の思いだけでも不適切です。他の人に伝えることが大事ですから。

もし、問題意識がなにも生まれてこないとしたら、その原因のひとつは、その分野の知識が足りないせいかもしれません。その場合、先行研究を調べて、読みこみ、違和感を探してやることで、問題意識が生まれることもあります。このように、自分の意見とは、他人の意見があってはじめて認識できるようになるのです。

こうしてつかんだ自分なりの視点から、学術的意義をもつと思われるような課題を探してみてください。

また、論文には課題に合わせたタイトルをつけなければなりません。タイトルは、課題を正確に伝えられるように、焦点を絞ってつけましょう。例えば、以下のようなタイトルは漠然としていて望ましくありません。

例……「テロとは何か」、「核兵器禁止条約について」、「ミンダナオ紛争について」、「ブータンの歴史」、「三島由紀夫『金閣寺』を読んで」

5-1-3 学術的意義≠社会的意義

もうひとつ、一年生が特に陥りがちな失敗があります。それは、学術的意義と社会的意義を取り違えてしまうことです。この二つは関連はありますが、それぞれ別のものです。

社会的意義としては、人々の暮らしをよくすることや、多くの人に共有されて無駄を省けることなどがあります。「有用性」や「公益性」と言いかえてもいいでしょう。個人や特定のグループではなく、広い範囲の人たちや社会にとって役に立つことです。

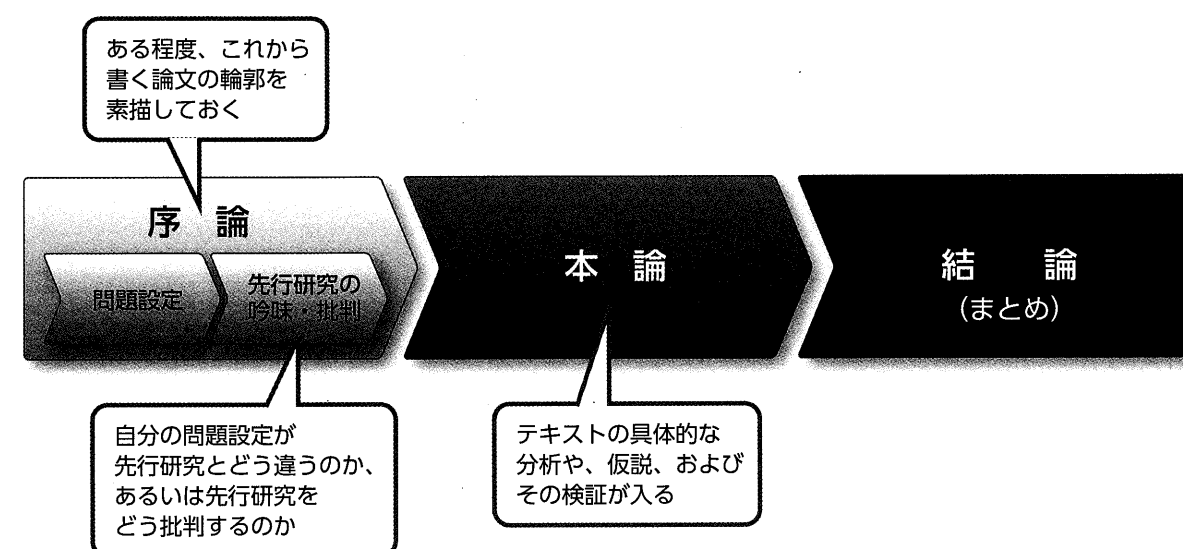
それに対して、学術的意義は少しわかりづらい、とらえづらいところがあります。言葉の上では、学術的意義は、社会的意義が社会にとってプラスの価値であるように、学問にとってプラスの価値を意味します。

たとえば、その学問のなかでなにか新しいことを発見すれば、それは社会に役立つかとは無関係に学術的意義があります。あるいは、ある問題に対して、オリジナリティのあるアプローチを見つければ、それはそれだけで評価されます。ほかにも、示唆的であること（視野が開けること）、生産的であること（プロダクティビティ）、体系的であること、網羅的であることなど、学術的意義にもいろいろあります。逆に言えば、たとえ社会的には役立たない、もしくはその価値がすぐには見つからない発見でも、学問のルールに沿って生み出されたものは学術的価値をもちます。

もちろん、社会的意義と学術的意義が重なるケースも多いのですが、かならずしも、社会的価値が学術的価値に直結しているとは限りません。そのことはぜひ覚えておいてほしいです。むしろ人文科学にせよ、社会科学にせよ、文系の学問には、考える枠組みをひろげるという重要な働きがあります。例えば、人々にまだあまり気づかれていない可能性を見出して、選択肢として共有する、といったことです。

そのためには、最終的には何らかの社会的意義に結びつくとしても、いったんそれを宙吊りにして考え直してみる力が必要になってきます。他の人の、自分とはちがう意見を理解し、コミュニケーションしていく上でも、そうした力は欠かせません。

5-1-4 学術論文の構成



→ 理系のIMRADのように絶対的な「型」があるわけではないが、問題設定と先行研究の吟味は絶対に必要。

理系にはIntroduction, Methods, Results And Discussionのような決められた論文の構成があります。それにたいして、文系の論文、とくに日本語の論文ではそこまで厳格な構成はありません。

しかし、好き勝手に書いていいというものではありません。論文を書くうえで一番重要なのは、序論の問題設定の部分です。ここで、自分がどのような立場で、扱う問題や事象、作品を見ようとするのかを説明します。そして、自分の問題設定が先行研究とどう違うのか、あるいは先行研究をどう批判するのかを説明します。これは、自分の論文が先行研究とまったく同じものならば意味がないからです。先行研究にたいする目配りがあるかないかで、学術論文かどうかが決まるといっても過言ではありません。

逆に、(5-1-2でも書いたように) 先行研究の吟味から問題意識が芽生えてくることも少なくありません。そこで、ある問題や作品を発表や論文で扱おうとすれば、まず、先行研究を調べることになります。そこで先行研究の調べ方、そのスキルが重要になるわけです。

5-2-1 引用のルール

コピー・アンド・ペースト(コピペ)を避けるためには、「引用」の手続きをふまなくてはなりません。「引用」がまったくない論文やレポートというのは、少なくとも人文系ではちょっと思いつきません。そこで盗用にならないためのルールを守らなくてはなりません。適切な「引用」をおこなうために重要なことは大きくわけて二つあります。1. どこからどこまでが引用なのかわかるようにすること。2. 引用の典拠をしめす。言いかえればどこから引用したのかわかるようにすること、です。

1 どこからどこまでが他人の意見か、わかるようにする

→引用部が比較的短い場合、「」を使って引用箇所を示す

→引用部が比較的長い場合、前後に一行あけ、行頭を下げて(インデントして)引用だとわかるようにする

※どちらの場合でも、原文を一字一句変えずに使う。自己流にアレンジすることは許されない(ただし「[中略]」などをいれて、約めることは可能)。

※原典の文章をパラフレーズ(自分の言葉で言い換えること)する事もよくあるが、その場合も、注などで書誌情報を明記しなくてはならない。

*引用箇所が英語(外国語)の場合、「」の代わりに“ ” や ‘ ’ を使うこともある。

どこからどこまでが他人の言葉かははっきりと示すことで、盗用をふせぐことができます。通例ではカギカッコでくくったり、量が多い場合は行を分けて書くなどの方法が使われます。その場合の目安は3行で、3行を超える引用は、行を分け、引用部分を字下げして引用するケースが多いです。

その言葉にたいして批判を加えるのか、あるいは自説を補強する根拠にするのか、使い方はさまざまですが、他人はこう言っている、それにたいして自分はこう思うということを繰り返して論文は書かれています。「論文は対話である」と先に述べたのはこういう意味です。

そこで、どこが他人のことばなのかをはっきりさせる必要があります。自分の意見と他人の意見の境目があいまいでは対話はなりたちません。カッコにせよ、行わけにせよ、自分の言葉と他人の言葉の間に「しきり」をいれて、峻別することが重要なのです。

その際、引用する文章に手を加えてはいけません。そのままのかたちで書き写すのが原則です。自分の論旨に都合のいいように引用箇所を変更するのは、引用元の著者にたいしてアンフェアですし、悪質な場合改竄と見なされてしまいます。詳しくは、巻末に付した用例集も参考にしてください。

直接の引用ではなく、原典の文章をパラフレーズ(自分の言葉で言い換えること)して、レポートの中で使う場合も、注などで正確な書誌情報を補ってやる必要があります。「〇〇というロシア文学者によれば……であるという」という書き方だけでは不正確で、どの著作からの情報なのか、あとから迎れるよう、書き添えるようにしてください。

2 引用の典拠がわかるようにする

1) 引用が正しく使われているか判断できるようにする

2) 引用文献へのアクセスを確保する

著者・論文(著作)名・雑誌(新聞)名・出版社(出版地)・発行年・ページ数を脚注または文末注に明記する。画像を引用する場合、著作権にも留意する。

*「無断引用」は研究には原則的にない

もうひとつが、引用の典拠を記す、ということです。それは自分の文章を読んだ人が、その引用が適切なものか判断できるようにし、さらには今後の研究に向けてアクセスを確保するということです。

あなたが自分のレポートにだれかの文章を引用したとして、典拠がちゃんと明記されていないければ、読んだ人はその引用が適切なのか、そもそも判断できません。科学の世界では、再現性というものが大きな価値をもっています。ある興味深い実験結果をえたとしても、それが他人によって、追認されなくては意味がないのです。文系であっても、客観的に検証できるように書くということは非常に大きな意味を持っています。

また、あなたのレポートを読んで、だれかが引用されている文献に興味をもっても、典拠がなければ、そこでせっかく生まれた知的好奇心を遮断してしまうことになります。他者の言葉を引用しつつ、なにかを書くということは、過去から連綿と続く知的生産物のネットワークの末席に連なるといことなので、未来の同志のためにも道を開いておかななくてはなりません(3-6「芋づる式」の項を思い出してください)。

典拠を明記するというルールは、レポートや論文を他者に向かってひらかれたものにするうえで、非常に大切です。論文や研究は公共物としての性格を持っています。もちろん著作物として、著作権などによって保護されますが、同時に公益に供するものとして社会に開かれている性格もあるということです。たとえば、大学の博士論文は国立国会図書館に提出しなくてはいけないきまりになっています。そこで、一般に供されているわけです。卒業論文や修士論文も研究室に保管されるのが普通です。自分が書いたものだからといって、私蔵して他人に見せないということは許されません。レポートであっても、常に他者の目を意識するようにしてほしいと思います。

具体的な引用の典拠の示し方については、いろいろな方法があり、分野によって標準的な方法は異なります。ですが、著者・論文(著作)名・雑誌(新聞)名・出版社(出版地)・発行年・ページ数を明記するという基本は変わりません。最低限これらの情報があれば、図書館のOPACなどで情報源(ソース)にたどりつくことができます。

レポートで画像(写真、図、グラフなど)を引用する場合も出典をかならず記します。「だれが」その画像の著作権を持っているのか、留意するようにしてください。

付随して、引用の自由ということに触れておきたいと思います。最近は「無断引用を禁じる」という文言をウェブ上で目にもすることもままありますが、著作権法は、研究目的での引用を原則的に認めています。ですので、レポート等で引用する際にも、いちいち許可をとる必要はないということです。これは自分の著作物にもあてはまります。このように研究は、相互の権利を認め合って成立しているものなのです。

5-2-2 注の種類と付け方

ここでは注の種類と付け方について説明します。まず、形式面で「脚注方式」と「割注方式」に分類できます。

「脚注方式」とは、引用・参照箇所の最後に注番号をつけ、そこで示すべき書誌情報を脚注欄または文末注欄に省略せずに書く方法です。脚注とは、ページの下段（縦書きの場合は左端）に記される注のことで、「文末注」は、書籍・論文の最後（章末のこともある）にまとめて記される注のことです。なお、同じ文献が2回以上出てきた場合はルールにのっとって省略する場合があります。

「割注方式」とは、論文の最後に、引用・参照した文献すべてを著者の姓の五十音順（またはアルファベット順）に並べたリストをつけ、本文中では引用・参照箇所の最後にカッコをつけて著者の姓、出版年、コロンの（半角コロンのと半角スペース）、ページ数を入れて示す方法です。どちらの方式を使うかは分野ごとに変わるので、授業担当の先生に確認してください。ただし、文章全体で方式を統一してください。

いずれの場合も、同じ注に複数の文献を記載する場合は、セミコロンで区切って並列してください。また、Wikipediaの記事などで、一つの注番号に一つの文献を割り振って、一ヶ所に複数の注番号を並べるスタイルも見られますが、主要な学術論文ではこうした方法は使われません。

5-2-3 インターネットを情報源（ソース）とすることの問題点



Wikipediaに代表される
インターネットの情報……速報性にすぐれるが、逆に十分な検証をなされていない可能性がある。また多くが匿名で執筆されているため、信用性を担保できず、また誰にでも編集できてしまうため、再現性に欠ける。

専門書、学術論文……出版されるまでに、専門家や編集者によってもチェックを受けている

事典……専門家が項目を執筆している（リファレンス資料）

オンライン事典
（例：JapanKnowledge Lib）……基本的に複数の事典の集合なので信頼性は高い、また速報性も確保されている

……などで裏をとることが必要。

典拠について、ひとこと付け加えておきます。学術論文やレポートの典拠として、ウィキペディアに代表されるようなインターネットの情報をそのまま書くことは推奨されないということです。といっても、一概にインターネットの情報のすべてが悪いとは言えません。ネット特有の匿名性・速報性が、論文やレポートにはそぐわないことが多々あるということです。

ウィキペディアは、大変便利なツールで、研究者であっても、ちょっと気になったこと、自分の直接の専門分野ではない事柄を調べるのにはよく使います。ウィキペディアをはじめとするウェブサイトの類は、まだ事典類にも載っていないような、最新の現象について知識をえるのにもっとも威力を発揮します。反面、だれでも事前のチェックを受けずに編集できてしまうため、誤った情報が掲載されている可能性も少なくありません。インターネットの特徴であり、便利な点でもある匿名性が、論文には適していないのです。最近ではソース（情報元）についての記載があるケースも増えてきましたが、まったく情報のでどころがわからない記事も残っています。対象についておおまかな情報をえたら、それが正しいのかどうか、自分でほかの資料などを用いて裏づけをしなければなりません。

また、ウィキペディアのようなウェブ経由の情報を引用元として記載して、あとからその情報を参照しようとしても、記事がすでになくなっていたり、編集されているということがおこります。論文にとって重要な、再現性やアクセスを担保できないということになります。

それに対し、学術論文や研究書の多くは、出版されるまでに複数の専門家のチェックを受けるのが普通です。あらかじめ情報の正確さを担保されているわけで、引用の典拠とするのに申し分ありません。

また、百科事典も対象について基本的な情報をえるのに便利なツールです。百科事典や人名事典、歴史事典のようなタイプの資料のことを「リファレンス資料」と呼びます。通読するのではなく、未知のことについて情報を得たいときに参照する資料だからです。多くのネット経由の情報は「リファレンス資料」にはならないことに注意してください。

東京大学が契約しているJapanKnowledge Libというデータベースは、複数の百科事典・専門事典を同時にひくことができるシステムですので、ぜひ使ってみてください。インターネット経由の情報でも、JapanKnowledge Libのように出典がはっきりしているものは論文のソースとして適しています。百科事典に載っている内容について、あまりに一般的なものはいちいち出典を断る必要はないですが、論文やレポートでとくに引用したい場合には、JapanKnowledge Libのような複合百科事典の場合、どの事典からの引用なのかも明記しておきましょう。

5-2-4 書誌情報の記し方

書誌情報に関して、原則として、著(編)者、タイトル、発行元(≒出版社)、発行年を明記すること(外国語文献の場合、出版地が加わることもある)が重要です。論文の場合、ここに開始ページと終了ページをくわえて記すこと。注では引用したページ数を書籍・論文ともに明記することになっています。

ここでは「様式集」として以下に東京大学の社会系、人文系それぞれで使われている代表的な文献の表記法をあげました。また、脚注の例もあげておいたので、自分でつける場合の参考にしてください。

なお、英語をはじめとする外国語については、より精密な出典表記の方法が定められていることがあります。特にみなさんになじみがあると思われる英語については、英語部会および教養教育高度化機構による『知識のうらづけ／情報のみなもと―出典表記と文献記載の方法―』という小冊子にも詳しい記載がありますので、参考にしてみてください。

また、東京大学では、書誌情報をWeb上に保存しておける文献管理ツールRefWorksも利用できます。使い方はGACoSのFAQ「RefWorksを使うには？」に掲載されており、総合図書館(本郷)で講習会も開催されています。

5-2-5 様式集

出典の記載法はChicago Styleなど複数あり、学問分野によって慣習が異なります。レポートや論文の執筆では当該分野の文献表を参考にしてください。以下には、『東京大学教養学科総合社会科学分科学際卒業論文執筆マニュアル』と教養学科超域文化科学分科学際日本文化論コース『卒業論文執筆必携マニュアル』をもとに、東京大学教養学部で使用されることが多い様式を紹介します。

- * 実際には引用ページ数を表記することになる
- * 一つのレポートでは、日本語・外国語文献でそれぞれ書式を統一する
- * 日本語の単行本・雑誌は「」(二重カッコ)で、論文は「」(一重カッコ)で記す。アルファベット表記の単行本・雑誌はイタリック(斜体)で、論文は“ ”(クォーテーションマーク)で記す。
- * 単行本や論文などの学術的著作と新聞記事のように種類が異なる資料は、分けて記載する。
- * 著者名を五十音順ないしアルファベット順で整理して記載する。

1. 単行本

a. 著者が一人の場合

Crowell, Steven-Galt, *Husserl, Heidegger and the Space of Meaning* (Evanston: Northwestern University Press, 2001)

南風原朝和『心理統計学の基礎 統合的理解のために』有斐閣アルマ、2002年

b. 著者が複数の場合

Luca C.-S., Luigi et al., *Cultural Transmission and Evolution: A Quantitative Approach* (Princeton: Princeton University Press, 1981)

井口時男・往住彰文・岩山真『文学を科学する』インターレクチュアライブラリ、朝倉書店、1996年

c. 翻訳者や編者がいる場合

Márquez, G.-G., *Love in the Time of Cholera*, trans. Edith Grossman (London: Cape, 1988)

谷川健一[編]『日本民俗文化資料集成 動植物のフォークロアⅡ』第12巻、三一書房、1993年

d. 電子ブック(サイト名・URL・ダウンロードやアクセスの日付を記載)

Kurland, P. and Lerner, R. eds., *The Founders' Constitution* (Chicago: University of Chicago Press, 1987), Electronic resources from the University of Chicago Press Books Division, <http://press-pubs.uchicago.edu/founders/>. 2016年12月1日DL.

2. 論文

a. 紙媒体の雑誌論文

Rosecrance, Richard N., “Bipolarity, Multipolarity, and the Future”, *Journal of Conflict Resolution*, 10-3 (September, 1966), pp.306-320

三浦篤「失われた絵画とサロン批評―ファンタン＝ラトゥールの《乾杯(真実礼讃)》をめぐる」『西洋美術研究』No.1(三元社、1999年3月)、101-124頁

b. 単行本所収の論文

Schatzki, Theodore R., “Human Activity as Indeterminate Social Event” in Egan, David et al eds.,

Wittgenstein and Heidegger (New York: Routledge, 2013), pp.179-194

金沢英之「三大考論争－神話的世界像の終焉と『古事記』のあらたな始まり」神野志隆光[編]『古事記の現在』(笠間書院、平成11年), 249-290頁

c. 電子ジャーナルの論文

Kuchenbuch, David, "In Search of the "Human Scale": Delimiting the Social in German and Swedish Urban Planning in the 1930s and 1940s" *Journal of Urbarn History*, 42-6, (November, 2016), pp.1044-1064, 2016年12月13日DL, DOI: 10.1177/0096144216675042
(※ DOIナンバーがある場合は付記すること)

3. 新聞

古賀大己・野口陽「日欧EPA交渉、長期化も 年内合意を断念 農産品の関税巡り溝」『朝日新聞』2016年12月18日朝刊

Lyons, Margaret, "Review: Debbie Reynolds and Carrie Fisher, at Home in 'Bright Lights'" *The New York Times*, 2017年1月5日

4. 辞典など

Gimaret, D., *Encyclopedia of Islam*, 2nd ed., s.v. "Sakar", Leiden: Brill

5. Web資料

★オンライン上で発表されている記事や論文については、紙媒体と同じく著者(署名記事の場合)、記事名/論文名、掲載媒体、記事の場合は掲載日/論文の場合は発表年月を記した上で、URLとアクセスした最終日を記す。

(例) 小泉悠「ロシアの背後に迫る新たな危機: ウクライナ危機に呼応し沿ドニエストルでも緊張高まる」 *JBPRESS*, 2015年6月11日, <<http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/44003>> (2015年7月8日閲覧)

(例) "Analysis: Defining genocide," *BBC News*, 27 August 2010, <<http://www.bbc.com/news/world-11108059>> (2015年7月9日閲覧)

★オンライン上のデータベースを利用して統計データを入手した場合は、データ提供機関、データベース名、URLおよびアクセス日を記す。

(例) World Values Survey, Online Data Analysis, World Values Survey Wave 6: 2010-2014, <<http://www.worldvaluessurvey.org/WVSONline.jsp>> (2015年7月5日閲覧)

★官公庁等公の機関のウェブサイトからの引用は、機関名、ページ名、資料名、URLおよびアクセス日を記す。

(例) 経済産業省、安全保障貿易管理ページ、「違反原因分析及び違反事例の概要」<http://www.meti.go.jp/policy/ampo/gaitameho_document/ihanngenninnbunnsekii.pdf> (2015年7月6日閲覧)

★公式な記録として発行される国際機関の決議や文書は、閲覧がオンラインであったか紙媒体であったかを問わず、発行機関の記号を付した文書番号と日付を書誌情報として記す。

(例) UN Doc. S/RES/1973 (17 March 2011)

★紙媒体で出版されている論文集、紀要、報告書等をeジャーナルなどオンラインで読んだ場合は、紙媒体を利用したとみなすことができる。したがって、紙媒体の論文等を読んだ場合と同じ形式で書誌情報を表記する。

*まれにオンライン版と紙媒体の冊子の構成が異なる場合があるので、可能なかぎり紙媒体のものを図書館で探し、オンライン版と同一であることを確認すること。

* CiNiiやGoogle Scholar等の検索URLを、論文タイトル等なしで貼り付けるのはNG。URLのトップにciniiやgoogle等、データベースの名称が含まれていたり、URLの中に検索ワードが入っている場合は要注意。別タブにそのURLを貼り付けて開き、同じ画面が出るかどうか確認すること。